

大学に期待されるおもちゃを媒体とした子育て支援の活動

－「おもちゃ広場」に訪れた参加者への調査から－

キーワード：子育て支援 未就学児 母親のニーズ おもちゃ 大学の地域貢献

甲斐鈴恵、末吉真紀子、吉田幸代、花野典子（宮崎県立看護大学）

I. はじめに

近年、少子化が進み、地域社会の結びつきの希薄化もあり、子育てを身近に体験できないまま母親となり、母親になってはじめて子どもの世話を経験する女性が増えている。加えて、近年の子育ては情報が山積みされており、不必要な情報も多く、情報に振り回され身近に相談する人もなく、子どもが思うように育たないために育児に不安をかかえる母親が増加している。宮崎県は2012年、合計特殊出生率1.68（全国1.39）、離婚件数2200件、離婚率22%（全国20%）であり、ひとり親と子どもからなる世帯は、平成17年9.3%、平成22年9.8%と増加傾向にある。また、県内・県外の転勤者も多く、近くに気軽に相談できる仲間がつかれず、孤立化している家族もいる。

本学では、地域貢献の一環として、2005年より看護職者である小児看護学教員（以下看護教員とする）によるおもちゃを媒体とした「おもちゃ広場」を開催している。初夏と秋に2回/年、8年間継続し実施する中で、多くの親子が集い、子どもとゆっくり過ごし、子どもと楽しむ様子や子育てについて語らう姿が観察されている。

これらおもちゃ広場を通じた看護実践の中から、2006年に末吉ら¹⁾は、スタッフである教員が、来場した家族の様子を観察し、再構成した場面を分析し、育児支援におけるおもちゃ広場の役割を意味づけ、看護者が担う育児支援の方向性を取りだし、花野²⁾は、子育て支援に必要な実践上の指針を取り出すという研究的取り組みを行ってきた。それらの方向性や指針を意識しながら、支援活動を行ってきたが、実際におもちゃ広場に参加している保護者が、看護教員による子育て支援活動に何を求めているのか、支援の方向性は合致しているのか再確認することの必要性を感じた。

そこで、今回、おもちゃ広場に参加した保護者の感想、および、看護教員が観察した親子の様子から、おもちゃ広場に求めている保護者の期待やニーズを明らかにしようと研究に取り組んだ。

II. 研究目的

おもちゃ広場に参加している保護者の期待やニーズを探り、看護教員による子育て支援の役割、おもちゃ広場の役割を明らかにする。

III. 研究方法

1. 対象調査

平成24年9月11日、12日に実施したおもちゃ広場に参加した子どもの両親・祖父母59名への調査用紙、および、看護教員が観察した親子の様子。

2. データ収集方法

1) 「おもちゃ広場」の参加回数、子どもの年齢、開催についての情報源、参加動機、参

加後の感想からなる調査用紙を作成し、「おもちゃ広場」入室時に、利用の仕方の説明と同時に、記入を依頼し、退室までの間に提出された記入された調査用紙をデータとする。

2) 看護教員が来場した家族の様子を観察し、子育て支援になり得たと思われた場面を記録に残す。

3. 分析方法

1) 調査表の参加回数や参加動機等の項目は単純集計を行う。

2) 調査表の自由記載の感想、および、看護者が観察して記録した場面については、得られた文章を文脈ごとにカードに分け、意味内容を読み取る。

3) 2) をもとに意味内容の共通性と相異性をもとに類別、カテゴリー化し、おもちゃを媒体とした子育て支援の効果について分析する。分析に関しては、研究者間の合意が得られるまで検討をくり返し信頼性の確保に努めた。

4. 倫理的配慮

おもちゃ広場に参加している保護者に、看護職者による子育て支援の一環であること、及び、研究の一環であること、おもちゃ広場活動中は育児支援に専念していること、研究を拒否しても支援内容に影響することがないことを口頭で説明する。また、調査に関しては、回答を研究に使用すること、個人が特定されないよう配慮を行うこと、調査用紙記入の参加は自由であることを説明し、記入された調査用紙の提出により、同意が得られたと判断した。

IV. おもちゃ広場の活動の概要

地域子育て支援事業の一環として、2005年より、子育て中の親（主に母親）が気軽に参加でき、個別な子育て相談にも応じる場として開催している。母親が育児に対して不安や疑問を感じやすい時期に支援の重点目標を置いているため、対象者は、主に未就学児（学校に行っていない子ども）とその保護者であるが、親子の参加であれば就学児も活用できる場としている。スタッフとして看護師・保健師資格を持つ看護教員、および、おもちゃコンサルタント、看護学生を配置し、気軽に声かけられ、子育て相談を気軽に行えるように一緒に遊ぶ中で関係が深まるよう配慮している。

実習室を一時的に開放し広さ約 800m²のスペースにジョイントマットを広げ、おもちゃを配置している。おもちゃは、看護大が所有している市販の250点と、県内のおもちゃ作家による木工創作玩具を使用。おもちゃの種類は、伝統的なもの、遊ぶ人がおもちゃに働きかけないと動かないもの（グットトイ認定玩具）を



中心としている。

参加料は無料で、例年初夏開催時には 200～350 名、秋開催時には 40～120 名の来場者がいる。

V. 結果

1. 調査に賛同し協力を得られた保護者の調査用紙は 44 名であった。(回収率 74.5%)

2. 参加者の背景

1) おもちゃ広場に参加した回数

「はじめて」は 31 名 (70.5%)、「2 回目」は 7 名 (15.9%)、「3 回目」は 5 名 (11.4%)、「4 回以上」は 1 名 (2.3%) であった。

2) 子どもの年齢 (複数回答 可)

「1 歳未満」は 5 人 (10.4%)、「1 歳以上～2 歳未満」は 22 人 (45.8%)、「2 歳以上～3 歳未満」は 12 人 (25.0%)、「3 歳以上～4 歳未満」は 4 人 (8.3%)、「4 歳以上」は 5 人 (10.4%) であった。

3) 「おもちゃ広場」を、知ったきっかけ (複数回答 可)

「人から聞いた」は 21 名 (47.7%)、「新聞をみた」は 15 名 (34.1%)、「チラシをみた (大学、支援センター、文化センター・おもちゃ屋、病院、保育園、回覧板)」は 10 名 (22.7%)、「看護大ホームページを見た」は 6 名 (13.6%)、「その他 (回覧板)」は 2 名 (4.5%) であった。

4) 参加したいと思ったきっかけ (複数回答 可)

「子どもが喜びそうだから」は 43 名 (97.7%)、「おもちゃに興味があったから」20 名 (45.4%)、「他の子ども・家族とも仲良くなれそうだから」は 4 名 (9.1%)、「子育てに関する情報が得られそうだから」は 2 名 (4.5%)、「その他」は 2 名 (4.5%) で「周りに同じ位の年の子がいない」「遠くに住んでいるママ友と打ち合わせをして、集合して遊べるから」であった。

5) 参加した感想について

「とても楽しかった」は 38 名 (86.3%)、「楽しかった」は 6 名 (13.6%)、「楽しくなかった」は 0 名 (0%) であった。

3. 調査用紙の自由記載、および、看護教員が観察して起こした場面の結果

調査用紙の提出された 44 名の感想の自由記載を文脈ごとに分け、42 の記述が得られた。また、看護教員が観察して記録した場面からは 29 の記述が得られた。それらの意味内容を読み取り、共通性と相異性をもとに類別、カテゴリー化し、おもちゃを媒体とした子育て支援の効果について分析したところ、表のとおり 11 個のサブカテゴリー、3 個のカテゴリーが生成された。以下、感想記述の文脈を「 」、スタッフである看護教員が来場した家族の様子を観察し得た記述を『 』、サブカテゴリーを< >、カテゴリーを【 】で示す。

1) 親と子どもがおもちゃを通して楽しみを共有体験できる場

感想から「木のおもちゃはとても温もりがあって、普段使わない分、新鮮でおもしろかった」「木のおもちゃは温もりがあり、安全な上、様々な作品を見て奥が深い」という記述が得られた。また、観察記録からは、『「ほとんどが木のおもちゃなんですね」と母親が発

した言葉を受け、自然のものに触れ合う感触を実感できるように、看護教員は展示しているおもちゃの紹介を行う』などの記述が得られた。これらから、プラスチックでは味わえない木の温もりや適度な重さなどの感触を親子が体感していると思われ、〈おもちゃの木の温もりを親子が実感する〉というサブカテゴリーを抽出した。

また、感想から「市販にない木のおもちゃに触れさせられる体験ができてありがたい機会」「手作りのおもちゃに触れる機会ははじめてだったのでいい経験」という記述が得られた。また、観察記録からは、『創作の木のおもちゃに関心を持った親子に、宮崎在住のおもちゃ作家の紹介や、創作おもちゃの意図やどのように作られているかなどを説明する』などの記述が得られた。これらから、おもちゃ作家による想像豊かなおもちゃに触れ合う体験を実感していると思われ、〈手作りの木のおもちゃに親子が驚き触れる〉というサブカテゴリーを抽出した。

また、感想から「家にはないおもちゃがたくさんあって楽しかった」という記述が得られた。また、観察記録からは、『子どもが夢中になって遊んでいるときに、側にいる母親に、そのおもちゃの利点やスタッフが選んだ意図などを伝えると、改めて、おもちゃの良さに気づく』『看護教員が遊び方のモデルを示すと、興味深そうにのぞき込み、母親自ら楽しそうに遊び始める。その様子を見た、子どもと一緒に参加する』などの記述が得られた。これらから、日常とは違った様々な興味深いおもちゃに触れていると思われ、〈子どもにとって、多種多様の興味深いおもちゃに魅惑され感動する〉というサブカテゴリーを抽出した。

また、感想から「毎回楽しそうに遊ぶのでおもちゃ広場大ファン」という記述が得られた。また、観察記録からは、『子どもだけでなく母親にも触れて遊ぶことを促すと、母親も夢中になって遊び始める姿もあった』『子どもの興味を誘うかのように、母親が遊びのモデルを示し、子どもがおもちゃに導かれて遊び始める』などの記述が得られた。これらから、子どものみでなく、親の心が動き楽しんでいると思われ、〈親自身が楽しめる場〉というサブカテゴリーを抽出した。

これらの4つの意味内容は、親と子どもが同じおもちゃや時間を共有し、感動を共にしていることから、【親と子どもがおもちゃ遊びを通して楽しみを共有体験できる場】というカテゴリーとした。

2) おもちゃ遊びを通して気づく子どもの成長・発達

感想から「たくさんのおもちゃがあって、自分の子どもがどんなおもちゃが好きなのか、知りたかったのでとてもよかった」「いろいろなおもちゃと遊ぶことができ子どもの興味のある遊びを知ることができて親子楽しい時間を過ごすことができた。子どもはいろんな遊び方をするのだと思った」という記述が得られた。また、観察記録からは、『看護教員が、子どもの年齢発達に応じたおもちゃを選び、興味を惹くような遊び方を行うと、その動きに導かれて笑顔で遊び始める』などの記述が得られた。これらから、おもちゃで遊ぶ姿から、日常では気づかなかった子どもの一面に気づいていると思われ、〈親が子どもの様子を観察し、新たな一面を発見する〉というサブカテゴリーを抽出した。

また、感想から「前回のことを覚えていたり、前回より楽しめていたりして成長が感じられた」という記述が得られた。また、観察記録からは、『「去年はこのおもちゃが好きだ

ったのに、今年は見向きもしないね。今年は、これがヒットみたい」と我が子の遊び方の変化を実感』『「自分より小さい子におもちゃを貸してあげてる。そういうこともできるようになったんだ」と子ども同士の関わりを見て話す母親』『看護教員は子どもが上手にできたことを喜び、母親が子どもの成長発達を再確認できる場となるよう導く』などの記述が得られた。これらから、前回と今回の様子を比較するきっかけとなり、また、普段他の小さな子どもと接する機会が少ないため年上の思いやりの行動をとる我が子の様子を改めて感じる機会となっていると読み取り、＜親が子どもの様子を観察し、成長している一面の発見＞というサブカテゴリーを抽出した。

また、感想から「久々に同年代の子ども達が遊ぶ場所に来て、息子が楽しそうで私も嬉しかった」「他のお子さんとも遊べて、とても楽しそうにしてくれたのでよかった」という記述が得られた。また、観察記録からは、『3歳位の女兒が2歳位の女兒にお人形遊びをする仕草を見せていた。その後、2歳位の女兒が、真似をして上手にお人形遊びをしていた』『身近に子どもがいないのでけんかをする機会がないため、同じおもちゃを取り合った。少し見守った後に、子ども達を上手に導いてけんかとならないように声かけしている親の姿があった』などの記述が得られた。これらから、子ども同士がお互いに刺激となって成長し合っている様子から、＜子ども同士が刺激となって育ちあう＞というサブカテゴリーを抽出した。

これらの3つの意味内容は、おもちゃや子どもの遊び方を通して子どもの新たな一面や成長の過程に気づき実感できていると思われることから、【おもちゃ遊びを通して気づく子どもの成長・発達】というカテゴリーとした。

3) 場に安心し自然に相談が行われ、求めている情報が得られる

感想から「日頃家事に追われて、ゆっくり遊んでやれないのでじっくり相手をするのができてよかった」という記述があり、＜遊びのために確保された場所で遊ぶ体験＞というサブカテゴリーを抽出した。

また、感想から「とても気軽に参加出来た」という記述が得られた。また、観察記録からは、『「この時間は、じっくり、この子と遊ぼうって思って、ずっと前から調整してきたんですよ」と笑顔で話される母親がいる』などの記述が得られた。これらから、このような場を楽しみに心から待ち望み、子どもと接していると思われることから、＜リラックスしてじっくり向かい合い参加出来る場＞というサブカテゴリーを抽出した。

観察記録から『「看護師さんなんですか？でしたら、聞きたいことがあるんですけど・・・こんなことも聞いていいんですか？』『「ちょっとした便秘や食事のことは大きな病気ではないので、わざわざ相談のために時間をとり、病院に行くのもためらいがある」などの思いが表出された』『子どもが上手に遊んでいる様子を共に喜び、暫く側にいると、母親から、予防接種の受け方や食事や排泄などについて、ぼつりぼつりと話し始めた』などの記述が得られた。これらから、ふとした瞬間に、子どものことで気になっていたことを母親が話題にしていることから、＜自然と心に留まっていたことが表出される場＞というサブカテゴリーを抽出した。

観察記録から『「一般的には、この位の子って、どんなことが出来るようになるんですか？」と子どもの遊ぶ様子を見て話される母親』『近くで遊ぶ子どもの様子を見て、「うちの子は

あの子と同じくらいなのかしら」と、気にかけて母親の様子があった』『「うちの子と同じ位の子に出会う機会がなくて・・・」と話される母親』などの記述が得られた。これらから、子どもに関する情報を求めていると思われ、＜子どもの成長発達などについての情報が欲しい母親＞というサブカテゴリーを抽出した。

これらの4つの意味内容は、子どもの遊ぶ様子を安心して見守り、そばに居る看護教員に安心ができたときに少しずつ会話が始まりやり取りが始まることから、【場に安心し自然に相談が行われ、求めている情報が得られる】というカテゴリーとした。

表 おもちゃを媒体とした子育て支援の効果についての分析

カテゴリー	サブカテゴリー	記述
親と子どもがおもちゃを通して楽しみを共有体験できる場	おもちゃの木の温もりを親子が実感する	<ul style="list-style-type: none"> ・木のおもちゃはとても温もりがあって、普段使わない分、新鮮でおもしろかった ・木のおもちゃは温もりがあり、安全な上、様々な作品を見て奥が深いと思いました ・遊んだことのないおもちゃや、木のおもちゃにとっても楽しく遊ばせてもらいました ・木の温もりがありよかった ・木のおもちゃがたくさんあったので嬉しかった ・木のおもちゃがたくさんあったのにびっくりした ・木のおもちゃは普段触れることがないので、遊んで親も楽しかった ・見たことがないような木のおもちゃもあり楽しかった ・木のおもちゃがたくさんあって楽しく遊べた ・木のおもちゃは本当によく考えて作ってあり、そして、子どもも夢中になって遊べるものばかりでよかったです ・木のおもちゃや、触れたことのないおもちゃがたくさんあり、とても楽しかったです <p>*「ほとんどが木のおもちゃなんですね」と母親が発した言葉を受け、自然のものに触れ合う感触を実感できるように、スタッフは展示しているおもちゃの紹介を行う</p>
	手作りの木のおもちゃに親子が驚き触れる	<ul style="list-style-type: none"> ・市販にない木のおもちゃに触れさせられる体験ができてありがたい機会 ・手作りのおもちゃに触れる機会をはじめてだったのでいい経験になりました ・手作りの木のおもちゃがよかった <p>*創作の木のおもちゃに関心を持った親子に、宮崎在住のおもちゃ作家の紹介や、創作おもちゃの意図やどのように作られているかなどを説明する</p> <p>*創作の木のおもちゃの遊び方を示し、親子が楽しく遊びを展開できるように導く</p> <p>*創作の木の感触に触れ合えて遊べるよう促す</p>
	子どもにとって、多種多様の興味深いおもちゃに魅惑され感動する	<ul style="list-style-type: none"> ・家にはないおもちゃがたくさんあって楽しかった ・家にはないおもちゃで遊ぶ姿が見られた ・いつもと違うおもちゃと遊べて喜んで ・おもちゃがたくさんあって（家にはないおもちゃ）子どもが大喜び ・いろいろなおもちゃがあるので、子どもが自由にできてよかった ・支援センターにないようなおもちゃがたくさんで子どもも喜んでいたし親も楽しめた ・普段使うことのないおもちゃがたくさんあり刺激になる ・家にはないおもちゃで子どもを遊ばせることができ楽しかった <p>*子どもが夢中になって遊んでいるときに、側にいる母親に、そのおもちゃの利点やスタッフが選んだ意図などを伝えると、改めて、おもちゃの良さに気づく</p> <p>*看護者が遊び方のモデルを示すと、興味深そうにのぞき込み、母親自ら楽しそうに遊び始める。その様子を見た、子どもと一緒に参加する</p> <p>*子どもの興味を惹くように看護者がボールを穴に落として転がるボールを見せると、子どもがおもちゃに引き寄せられ、夢中になって遊ぶ姿に親が喜ぶ</p> <p>*6ヶ月の月齢児、1歳の月齢児、2歳の月齢児などに応じたおもちゃを紹介して遊べるよう促す</p>

	親自身が楽しめる場	<ul style="list-style-type: none"> ・毎回楽しそうに遊ぶのでおもちゃ広場大ファンです ・親子で楽しめた ・自身も楽しむことができた。また、来たい ・楽しめた。また、是非開催をお願いします ・子どもも楽しそうに遊んでいました ・定期的に実施してもらえたら嬉しいです <p>*子どもだけでなく母親にも触れて遊ぶことを促すと、母親も夢中になって遊び始める姿もあった</p> <p>*子どもの興味を誘うかのように、母親が遊びのモデルを示し、子どもがおもちゃに導かれて遊び始める</p>
おもちゃ遊びを通して気づく子どもの成長・発達	親が子どもの様子を観察し、新たな一面を発見する	<ul style="list-style-type: none"> ・たくさんのおもちゃがあって、自分の子どもがどんなおもちゃが好きなのか、知りたかったのととてもよかった ・いろいろなおもちゃと遊ぶことができ子どもの興味のある遊びを知ることができて親子楽しい時間を過ごすことができました。子どもはいろいろな遊び方をするのだと思った ・子どもがどんなことに興味を示すのかが分かってよかった ・子どもの興味のあるおもちゃが分かった ・ころころ転がるものが好きだった ・子どもが興味深そうに遊んでいて親としては満足だった <p>*看護師が、子どもの年齢発達に応じたおもちゃを選び、興味を惹くような遊び方を行うと、その動きに導かれて笑顔で遊び始める</p> <p>*「そんなおもちゃが好きだったんですね。知らなかった」と子どもが家にないおもちゃで遊ぶ姿を見て驚き喜ぶ母親</p>
	親が子どもの様子を観察し、成長している一面の発見	<ul style="list-style-type: none"> ・前回のことを覚えていたり、前回より楽しめていたりして成長が感じられた <p>*「去年はこのおもちゃが好きだったのに、今年は見向きもしないね。今年、これがヒットみたい」と我が子の遊び方の変化を実感</p> <p>*「自分より小さい子におもちゃを貸してあげてる。そういうこともできるようになったんだ」と子ども同士の関わりを見て話す母親</p> <p>*看護師は子どもが上手にできたことを喜び、母親が子どもの成長発達を再確認できる場となるよう導く</p> <p>*穴に入れることができた、ボールを握ることができたなどの、できた出来事を脳の発達と重ねて母親にフィードバックする</p> <p>*「このくらいのことが出来るようになった。ついこの前までできなかったのに」と話す母親</p>
	子ども同士が刺激となって育ちあう	<ul style="list-style-type: none"> ・久々に同年代の子ども達が遊ぶ場所に来て、息子が楽しそうに私も嬉しかった ・他のお子さんとも遊べてとても楽しそうにしてくれたのでよかった <p>*3歳位の娘が2歳位の娘にお人形遊びをする仕草を見せていた。その後、2歳位の娘が、真似をして上手にお人形遊びをしていた</p> <p>*身近に子どもがいないのでけんかをする機会がないため、同じおもちゃを取り合った。少し見守った後に、子ども達を上手に導いてけんかとならないように声かけしている親の姿があった</p>
場に安心し自然に相談が行われ、求めている情報が得られる	遊びのために確保された場所で遊ぶ体験	<ul style="list-style-type: none"> ・日頃家事に追われて、ゆっくり遊んでやれないのでじっくり相手をする事ができてよかった
	リラックスしてじっくり向かい合い参加出来る場	<ul style="list-style-type: none"> ・とても気軽に参加出来ました <p>*「この時間は、じっくり、この子と遊ぼうって思って、ずっと前から調整してきたんですよ」と笑顔で話される母親がいる</p> <p>*「なかなか日頃はこんなふうに、子どもと遊んでいないですよ。今日は特別です」と笑顔で子どもに向かいあう母親</p>
	自然と心に留まっていたことが表出される場	<ul style="list-style-type: none"> *「看護師さんなんですか？でしたら、聞きたいことがあるんですけど……こんなことも聞いていいんですか？」 *「ちょっとした便秘や食事のことは大きな病気ではないので、わざわざ相談のために時間をとり、病院に行くのもためらいがある」などの思いが表出された *子どもが上手に遊んでいる様子を共に喜び、暫く側にいると、母親から、予防接種の受け方や食事や排泄などについて、ぼつりぼつりと話し始めた *「流行感染が多く受診している時期は、我が子が病気ではない場合、相談のために病院に行くのをためらった」などの思いが表出された

子どもの成長発達などについての情報が欲しい母親	<p>*「一般的には、この位の子って、どんなことが出来るようになるんですか？」と子どもの遊ぶ様子を見て話される母親</p> <p>*近くで遊ぶ子どもの様子を見て、「うちの子はあの子と同じくらいなのかしら」と、気にかけて母親の様子があった</p> <p>*「うちの子と同じ位の子に出会う機会がなくて・・・」と話される母親</p> <p>*「本には、こんなふうを書いてあったから・・・」と話を続ける母親</p>
-------------------------	---

「・」は母親の自由記載の感想

「*」は、看護者が観察して起こした場面

VI. 考察

今回、子育て支援活動である「おもちゃ広場」に参加された保護者の心に残った感想や看護教員が観察して記述した場面の分析を行った。調査用紙の記入は、参加された全ての親の感想が得られたわけではなく、子どもの相手をしながら記入する時間が取れず記入できなかった親、次の予定を頭に入れながら限られた時間ぎりぎりまで遊び、記入しそびれた親もみうけられた。そのため、十分に書き記されていない親子の思いが含まれている可能性、記入されていない親に、違った感想をもたれている可能性が否定できない。そこで、看護教員が親子の様子を観察した内容を合わせて、分析を行った結果、われわれが行っているおもちゃ広場は、親と子どもがおもちゃを用いて楽しい時間を共有し、子どもの成長・発達を再確認し、心が解放された親が子どもに関する相談を自然と行い、求めていた情報が得られる場となっていると再確認することができた。

これらについて、看護教員による子育て支援活動に求められている役割について、「おもちゃを子育て支援のツールとすることの意義」「子どもと親が安心して楽しめる場」「子育てに関する情報提供の場」の視点から考察する。

1. おもちゃを子育て支援のツールとすることの意義

子ども本来のもてる力が表現され、親子にとって心地よい場となるには、親子とスタッフが共に共有できる場が重要であると思われ、おもちゃを媒体とした子育て支援が最適だと判断した。なぜなら、おもちゃを子育て支援のツールとして活用することで、子どものみならず親の心がワクワク感動することや、子どもの成長・発達が引き出されると私たち看護教員は考えたからである。そのためには、適切なおもちゃの選定が重要であり、初年度は日本グットトイから、100点近くのおもちゃを借りて実施した。その後、看護大所有のおもちゃが徐々に増え、翌年からは看護大と宮崎のおもちゃ作家の木工創作玩具のみで、企画・開催ができるようになった。

開設当時から、「みて、ふれて、感じて」を願い、子どもたちが展示されたおもちゃを見たり、触れたりしながら、心が動くことを子育て支援の重点としてきた。子どもや親との関係を築く媒体としておもちゃが存在することで、家とは異なる環境でも、自然な子どもの様子や親子関係が発揮されるまでの時間が短縮できる。また、おもちゃに手を伸ばしたり、ボールを入れたり、引っ張ったりなど具体的な働きかけがあり、会話が生まれる。さらに、おもちゃ広場で準備しているおもちゃは、能動的な働きかけがないと変化しないおもちゃが多い。能動的に働きかけることで、おもちゃの形や音が変化し、その変化によって、心が動かされ驚きや感動につながっていく。さらにその驚きや感動を求めて、おもちゃに働きかけ遊び続けることが可能となっている。

また、私たちが子育て支援の対象としている未就学児は、まさに、心身ともに成長期で

ある。脳は6歳までの成長発達が著しく、とくに3歳までに80%が完成するといわれている。脳神経細胞のネットワークは、心が動き感動するという新たな刺激によってさらに構築されるため、おもちゃ広場が脳への刺激となることを期待した工夫もしている。展示するおもちゃは、大学所有の250点という中から、その時の状況に応じて、おもちゃを看護者の視点で厳選し準備している。また、宮崎のおもちゃ作家と共同して、想像豊かな両手を広げた大きさの木工創作玩具も展示している。木のおもちゃは、高価であり家では買えないものも多い。一度に多くのおもちゃに触れ合う機会、非日常的な、広く開放された、感動をつくり出す場として、「おもちゃ広場」が存在し、それにより子どもの成長発達を促進する機会ともなっている。

さらに、おもちゃを通じた遊びは、子どものみが単独で遊ぶのではなく、そこに共有できる人(母親)がいることで喜びが倍増するとともに、他者が介入することによって、子どもだけの遊び方とは違った、新しい遊び方へと変化が生まれる。そのバラエティ豊かな遊び方を通して、会話が増え、人間形成の基盤である信頼関係も築かれる。そのような子どもの姿を見た親は、子どもの一生懸命に遊ぶ姿に、新たな発見があり、思わずその場にいるスタッフと感動を共有することもある。このような親子関係が上手に作られている場合は、スタッフが見守り後押しすることでよりよい関係が深まっていく。一方、少子化で他の子が育つ機会を見ることが少ない親にとっては、どのように子どもと関係をつくったらよいか戸惑いが見受けられることもあり、看護教員がそのきっかけをつくり、関わり方のモデルを示すことで親子のより良い関係へと発展していく。看護教員は、親子の関わりを見守り、その母親の思いに寄り添い、親と子がリラックスし安心して遊べる雰囲気や必要に応じた支援を行っているからこそ、「木のぬくもりを感じて楽しかった」「親子で楽しめた」「子どもの興味のある遊びを知ることができた」など心豊かにそれぞれの親子に応じた感動の場面が形成され親子が楽しめる場となっているのではないかと考える。これらのことからおもちゃをツールとした子育て支援は重要な意味を持つといえる。

2. 子どもと親が安心して楽しめる場

今回、調査に協力の得られた保護者の97%が、子どもが喜びそうだと期待して、おもちゃ広場に参加していた。また、45%の保護者がおもちゃに興味があったと回答している。このことから、親自身が、準備されているおもちゃや、おもちゃのある空間に期待を寄せて参加していたことがわかる。そして、調査用紙を提出した保護者全員が、「とても楽しかった」「楽しかった」と回答しており、満足度の高い時間を過ごすことができていたことが確認できた。

親は日々、家事や育児、仕事などに追われ、ゆとりがなく生活している場合が多い。加えて、親は子どもと向き合い完璧な子育てをしようとして追い込まれ、親は自然な関わりから子どものニーズを捉え上手に子育てができるべきだという固定概念に縛られている場合も多い。そのため、このような、「遊ぶ」ことを目的とした空間があると、子どもと向き合いたいと意識している親は、子どもと触れ合うことを狙いとして訪れる。また、乳児とその上の兄弟と複数の子どもを連れて参加する家族もいる。普段自立を求められている上の子と親が十分遊べる時間が確保できるよう、小さい子をスタッフが預かる場合もある。これにより、この時間・空間だけは親として子どもに向かい合うことが可能となり、親が子ど

ものみに集中でき、心身ともにリラックスして過ごすことができると、子どもにもその思いが伝わり、子どもに笑顔が増えその笑顔に親が癒され自然と笑顔がこぼれてくる。このような相互作用が繰り返されていることから、おもちゃ広場が親子に居心地の良い空間として感じられていると予測できる。岡田ら^{3) 4)}の大学を拠点とした子育て支援の研究において、参加者が参加した理由として、「広い遊び場所」が80%以上を占め、他に「安全な遊び場所」「子どもと出かけるきっかけ」などがあった。渡邊ら⁵⁾の研究では、大学に期待されている子育て支援の内容として、「保護者と子どもが一緒に過ごせる開放された遊びの場の設置」が最も多く、他に「大学のスタッフや学生の保護の下で遊べる施設」などがあった。本学でも「いろいろなおもちゃと遊ぶことができ子どもに興味のある遊びを知ることができて親子楽しい時間を過ごすことができた」という保護者の感想から読み取れるように、同様の結果が得られた。

おもちゃ広場への親子の支援に関して、看護教員は「家族が希望するスタイルで活用できる場を提供しつつ、表出されにくい育児に関するニーズを汲み取り専門職者として常にこころをむけていることを伝える」⁶⁾ことを意識して関わっていた。また「支援の場は、親子にとって安心できる場であること」⁷⁾をもとに関わっていた。このように支援者として、親に看護教員による育児観を押しつけることなく、親子の関わりを見守り、必要に応じて手を差し伸べ、親が求める形で支援を提供していたからこそ、参加していた保護者が安心でき楽しいと感じる場になったと思われる。

3. 子育てに関する情報提供の場

今の親世代は、幼少の頃に周りに子どもが少なく、他者との関わり合いの少ない状況で育ってきた親が多いため、育児で困惑や不安に陥りやすい。また、親は、自宅での限られた1対1の空間にいと、目の前のことのみ引き寄せられ周りのことが見えなくなるため、狭い視野で子育てを行う危険性もある。そこで、親に、他からの新しい刺激や知識、および、関わり方のモデルが情報として入ることで、子どもの新たな成長や、新たな子育て方法に気づくなどの新しい発見に繋がると思われる。船越⁸⁾らの研究でも、大学教員に支援を希望する具体的な内容は、子どもの発達や健康などを気軽に相談したい、最新の医療や子育ての情報もほしい、であった。今回の研究でも、『「ちょっとした便秘や食事のことは大きな病気ではないので、わざわざ相談のために時間をとり、病院に行くのもためらいがある」などの思いが表出された』『子どもが上手に遊んでいる様子を共に喜び、暫く側にいと、母親から、予防接種の受け方や食事や排泄などについて、ぼつりぼつりと話し始めた』などの場面も観察されている。子育て支援の場に、看護師・保健師などの専門職者がいる安心感と、気軽に相談できるというスタイルは、多くの親に支持されている理由の1つである。特に、1人目の子育てや、乳児期から幼児期前半にある子どもの子育てに携わる場合には、めまぐるしい発達のため、親子共に新たな体験の連続であり戸惑いも多く見られる。渡辺⁹⁾らの研究においても、大学に期待されている子育て支援として、「専門的な知識の提供」「情報の発信」「学習の場」が求められており、安全の確保や、子育てについての不安や悩みなどが相談しやすい環境を、親が求めている証であると思われる。それらのことを意識しながら、今後も場の提供に取り組んでいきたい。

また、子どもと親の孤立化を防ぐため、同じ時期の子育てをしている他の親との情報交

換の場づくりが重要であり、親もそのような場を求めている。板野¹⁰⁾の報告でも、「同じ立場の人(月齢児)との情報交換がしたい」が、ニーズとして第1位に上がっていた。このことから、育児サポート体制づくりとして、同世代若しくは、その前後の子どもとその親が触れ合う機会づくりを行い、親同士のコミュニケーションがとれるような場としておもちゃ広場を活用していくことが重要である。

さらに、われわれが行っている「おもちゃ広場」は、自由参加型のオープン的な活動の場であり、気軽に参加できるメリットはある。しかし、「おもちゃ広場」に継続して参加される親子の姿もあり、半年及び1年での子どもの成長発達を実感できる一方、継続型の子育て支援の必要性に気づく場合もある。子どもの成長発達には幅があることをふまえつつ、子どもなりの成長を見守っていけるような支援を心がけていくとともに、必要に応じて、学内で行っている継続型の子育て支援に適切につないでいくことも必要である。今後は、学内での子育て支援の情報提供や連携の強化を行い、必要な人に必要な情報が行き届くように工夫していきたい。

VII. おわりに

おもちゃ広場に参加された保護者のニーズや期待を把握するために、調査および観察から得た場面を分析した結果、おもちゃを楽しむ親子の姿や、子育てに関する情報を求めている親の姿が明らかになった。支援の場は、親子にとって安心できる場であることを保障しつつ、家族が希望するスタイルで活用できる場を提供し、表出されにくい育児に関するニーズを汲み取り専門職者として常にこころをむけていることを伝えながら、子育て支援活動を今後も取り組んでいきたい。

引用文献

- 1) 末吉真紀子, 甲斐鈴恵, 花野典子 他: 看護者による育児支援の方向性の検討 ―おもちゃ広場に訪れた家族の様子から―, 日本小児看護学会(2006), 第16回学術集会 p 120
- 2) 花野典子: 子育て支援の指針に関する研究 ある子育て支援に看護者として参加した活動を通して, 宮崎県立看護大学紀要, 8(1), 28-39, 2008.
- 3) 岡田由香, 緒方京, 神谷摂子 他: 大学を拠点とした子育て支援の継続性・安定性をはかる取り組み; 大学と地域との連携促進モデル事業の活動報告(3), 愛知県立大学看護学部紀要, 16, 41-47, 2010.
- 4) 岡田由香, 高橋弘子, 佐久間清美 他: 大学を拠点とした子育て支援の継続性・安定性をはかる取り組み; 大学と地域との連携促進モデル事業の活動報告(2), 愛知県立大学看護学部紀要, 15, 33-38, 2009.
- 5) 渡邊照美, 森林, 山野井敦徳 他: 大学に期待される子育て支援の内容 地域のニーズ調査から, ぐらしき作陽大学 作陽音楽短期大学 研究紀要, 43(2), 41-60, 2010.
- 6) 前掲書1)
- 7) 前掲書2)
- 8) 船越和代, 大池明枝, 三浦浩美 他: 地域の子育て支援活動に置ける看護系大学教員の役割―子育て支援センターを利用している乳幼児の母親対象の調査から―, 地域環境保健副研究, 10(1), 48-52, 2007.
- 9) 前掲書7)
- 10) 板野美紀: 地域子育て支援情報提供に関するニーズの分析 子育て中の母親へのグループインタビューを通して, こども家庭福祉学, 6, 23-32, 2006.